

釣れ釣れなるままに

1996年思い出の釣行記 PART. 1

こいつは春から
縁起がしめい



鹿島釣狂

| | | | |
|-------|-------------|--------|-------|
| ☆開催日 | 平成8年4月21日 | | |
| ☆開催場所 | 中歌港～鵜泊港 | | |
| ☆入釣場所 | 鷹の巣岬 | | |
| ☆潮 | 干潮 | 23:35 | -8 cm |
| | 満潮 | 07:07 | 12 cm |
| | 干潮 | 11:17 | 8 cm |
| ☆天候 | 小雪 強風 波2～3m | | |
| ☆釣果 | ホッケ | 350 mm | 4 |
| | カジカ | 360 mm | 1 |
| | 重量 | 278 | 0g |
| ☆成績 | 合計点数 | 1008 | 点 |
| | 成績 | 10 | 位 |

単身赴任

春の人事異動で美唄から夕張に職場が変わった。秀峰夕張岳の麓にある山奥の小さな小学校に教頭として赴任することになった。愛する（自分で言うのはおこがましいが）妻や子どもたちと別れての単身赴任であり、環境の激変に戸惑いがちである。息子も旭川に高校進学となり寮生活を送っている。「洗濯は自分でする」と息子は言う。「洗濯機はいらない」と妻に押しつけてしまった私とは違い、感心させられる。娘も中学へ入学し念願のバスケット部に入り、毎日夜遅くまで練習に励んでいる。妻もこれ幸いとばかりに、新しい職場を物色し始めた。一緒に過ごしている時は、愚妻や愚息と置いていてもいざ離れて暮らすとなると寂しくもあり妙に人恋しい。

赴任地は変われども釣りの魅力は変わらず

赴任当日、岩見沢は晴天で路面も乾いた状態であり、単身赴任の小さな荷物を積んだ「黒猫ヤマト」も快調であった。しかし、さすが山奥になるとトンネルを越えた辺りから冬景色となる。川端康成の「雪国」の心境である。道路ぞいのシューパロ湖に目をやると、氷が一面張り詰めているではないか。凍て付いた湖面には人影が見える。ナントこんな4月になっても「ワカサギ釣り」ができるのである。

冬の楽しみができた。それとともに、シューパロ川での釣りが脳裏をよぎる。釣りに「きち」がつくほどの（実際の釣行回数は数えるほどしかないが）私である。深山溪谷でルアーを振っている自分が見える。いや、今年はフライに挑戦してみよう。岩見沢での飲み屋通いがなくなる分、フライを自分で巻いてみるのも乙ではないか。夢は次々に膨らんでくる。30cmの山魚女も50cmのアメマスも自分の手にしたようなものである。こんな大きな湖だもの、ひょっとして1mを越えるイトウだって手にすることができるかもしれない。

第1回大会（4月21日 中歌港～鵜泊港）

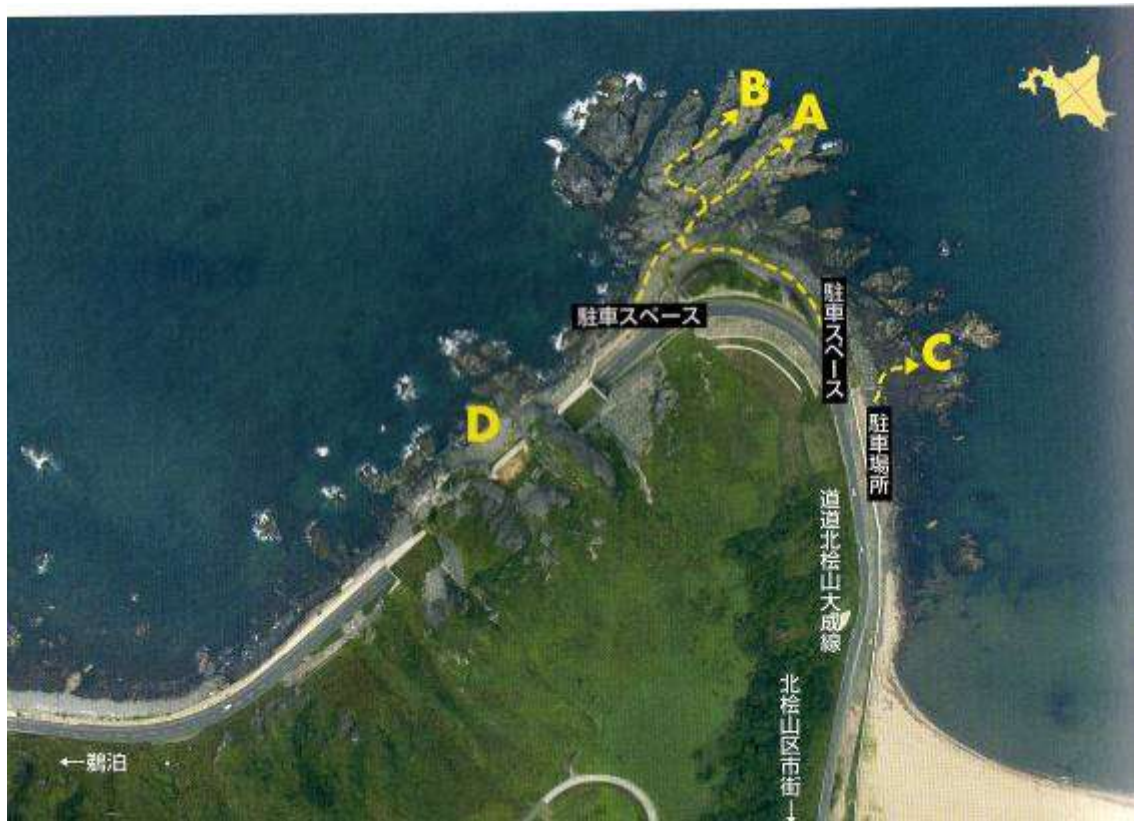
職業柄、休日でも何かと職場に足を運ばなければならない身であるが、職場の上司は好意的である。「おまえは毎日夜遅くまで熱心に（？）職務を遂行しているのだから、たまの休みぐらいのんびりとするがよい」とのありがたき御言葉。

4月21日の釣遊会第1回大会に参加する。釣場範囲は中歌港～鵜泊港である。勤務を終えて岩見沢へ到着したのは17時。早速、カナダ屋に直行しエサを仕入れる。イカゴロやカツオはストーブの前で溶かす。出発の午後8時になっても溶け切らないでシャーベット状である。こんなのでは先が思いやられる。

我に続け

第1回例会ということもあり、バスの中はいつにもまして華やいだ雰囲気である。皆、今年1年の好成績を思い描きながら釣場へと夢を馳せているのだろう。もちろんいつもの連中はほろ酔い気分にしたっている。もちろん私も情報を得んとほろ酔い気分（下心は読まれているかも？）で先輩に近づく。

この区間での釣行は1度もない。しかし、今回は珍しく先輩たちに開かずとも入釣場所は鷹ノ巣岬と決めてある。あの穏やかな海（実は航空写真でしか見たことがなく、釣り場状況を鮮明に写しだすために穏やかな日を選んでいるとのこと）に向かって荒々しく何本も突き出た形相には魅せられてしまった。



現地到着。私がバスから降りようとするやうとすると9人ばかりがついてくる。釣遊会のメンバーは場荒れしている有名釣り場にはほとんど入らないのであるが・・・？ 私のいつもの釣果に魅せられてのことか？ そんな訳はあるまい！ そこは4月にアカハラの大物が上がる太櫓川でもあったのである。先日の新開釣情報でも50cmを越えるものが何本か上がっていたとのことである。そんな事とは露知らず、ここに降りてしまったことを悔やむ。私はどちらかという本誌の植村年春氏のごとく、釣りに関してはできるなら一人がいい。普段の雑踏から逃れて雑念にとらわれず、釣りだけに集中できることが仕事の疲れを癒してくれるからである。しかし、降りてしまったものは今更どうするわけにもいかない。皆さんが目指す太櫓川河口ではなく、私が当初入ろうと思っていた岬先端部でもなく、その中間辺りの岩場（C）に入った。ここなら河口に近い分ひよとして50cmまでとはいかなくてもアカハラなら釣れるだろう。そしてカジカ、アブラコをもと虫のいい事を考えてほくそ笑む。

凍える中で

嵐、前野組は河口近くの離れ岩に海水を漕いで渡っていった。西川氏は河口ぎりぎり（もちろん海に向かって）でやっている。他の皆さんは遠浅の（その様に私は見えた）海に向かってイカゴロをドボンとやっている。私はというと、低い岩の上の横殴りに降りしきる雪の中で、しかも時折打ち寄せる高波の飛沫に濡れながら、やはり、負けじとドボンとドボンとやった。しかし、同じ事を繰り返すのみでいっこうにアタリがない。それどころか波は益々激しくなり、頭から被るようなものも時折ある。寒風に晒され、しかも、いまだ溶けきれないシャーベット状のイカゴロを掴んできた凍える手には、ホッカイロもなかなか効かない。

音沙汰なしで移動しようかと考えていた5時ごろ、待望のアタリだ。ちょい投げしておいたゴロ仕掛けにかぶりついてきた36cm程のカジカが上がった。続けてパタパタッと35cmぐらいのホッケが6本釣れた。これで2魚種5尾が揃った。アタリも遠のいて来た7時ごろ、辺りの様子を伺いにぶらぶらする。河口近くにいた人達は皆さん鷹ノ巣岬の左の湾洞に入っている。嵐・前野組は50cmを越えるアカハラを確保しており、さらにここでカジカ、ホッケ、アブラコと嫁さんもバッチリである。鷹ノ巣岬先端（A・B）の切れ込みでは、ウキ釣り師たちがホッケをバタバタと釣っている。私は元の場所に戻って諦めずに遠投するが、とうとうその後は1匹も釣れずに終わった。

帰りのバスは10時。しかし、いくら待っても来ない。30分ほどして反対方向からバスがやってきた。例の方向音痴が出てしまったのか？ バスに乗り込んで聞いてみると、「おまえがいないのに気が付いて戻ってきた」とのこと。後から考えると、旧道と新道との境で待っていた時に、1人なので寂しくなり、みんなのいる所に行こうかどうしようかと旧道の所でウロチョロしている間に通り越してしまっただけらしい。どうもあいすみません。ペコリ。

好成績続出

審査の結果、私は1008点で10位入賞である。やはり優勝は嵐氏で1317点。準優勝は前野氏の1290点。3位は荻野氏で1268点。身長賞は前野氏のアカハラ51.8cmだった。この日は会員の皆さん大変成績がよく1000点を越えた会員が12名にもなった。岡氏は1007点で11位、近藤氏は1005点で12位。はからずも私はわずか1点、3点の差で入賞できたのである。

「こいつは春から縁起がいいわい。」

